

第4章 寒風沢島（寒風沢元屋敷貝塚他）の確認調査

1. 浦戸農地海岸災害復旧事業に係る寒風沢元屋敷貝塚他確認調査

調査要項

遺跡名：寒風沢元屋敷貝塚（県遺跡地名表登録番号11034）、平戸貝塚（県遺跡地名表登録番号11010）、平戸B貝塚（県遺跡地名表登録番号11043）、平戸C貝塚（県遺跡地名表登録番号11044）、浦戸貝塚（県遺跡地名表登録番号11009）、前浜囲貝塚（県遺跡地名表登録番号11029）隣接地

時代・種別：平安時代の貝塚・製塩遺跡（寒風沢元屋敷貝塚・平戸貝塚・平戸B貝塚・平戸C貝塚・前浜囲貝塚）、縄文時代中期（大7b・8a・8b式期）、平安時代の貝塚・製塩遺跡（浦戸貝塚）

所在地：塩竈市浦戸寒風沢字新大迎・新平戸・平戸・新小峯・新本屋敷・桃和田上・桃和田下

調査原因：浦戸農地海岸災害復旧事業（寒風沢農地地区）〈東日本大震災復興関連事業〉

事業者：宮城県仙台地方振興事務所

調査期間：平成27年5月11日～5月21日（実働7日間）

調査主体：塩竈市教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会、宮城県仙台地方振興事務所農業農村整備部、熱海建設株式会社

調査担当：引地弘行、田中秀幸、大本朋弥、柳澤和明

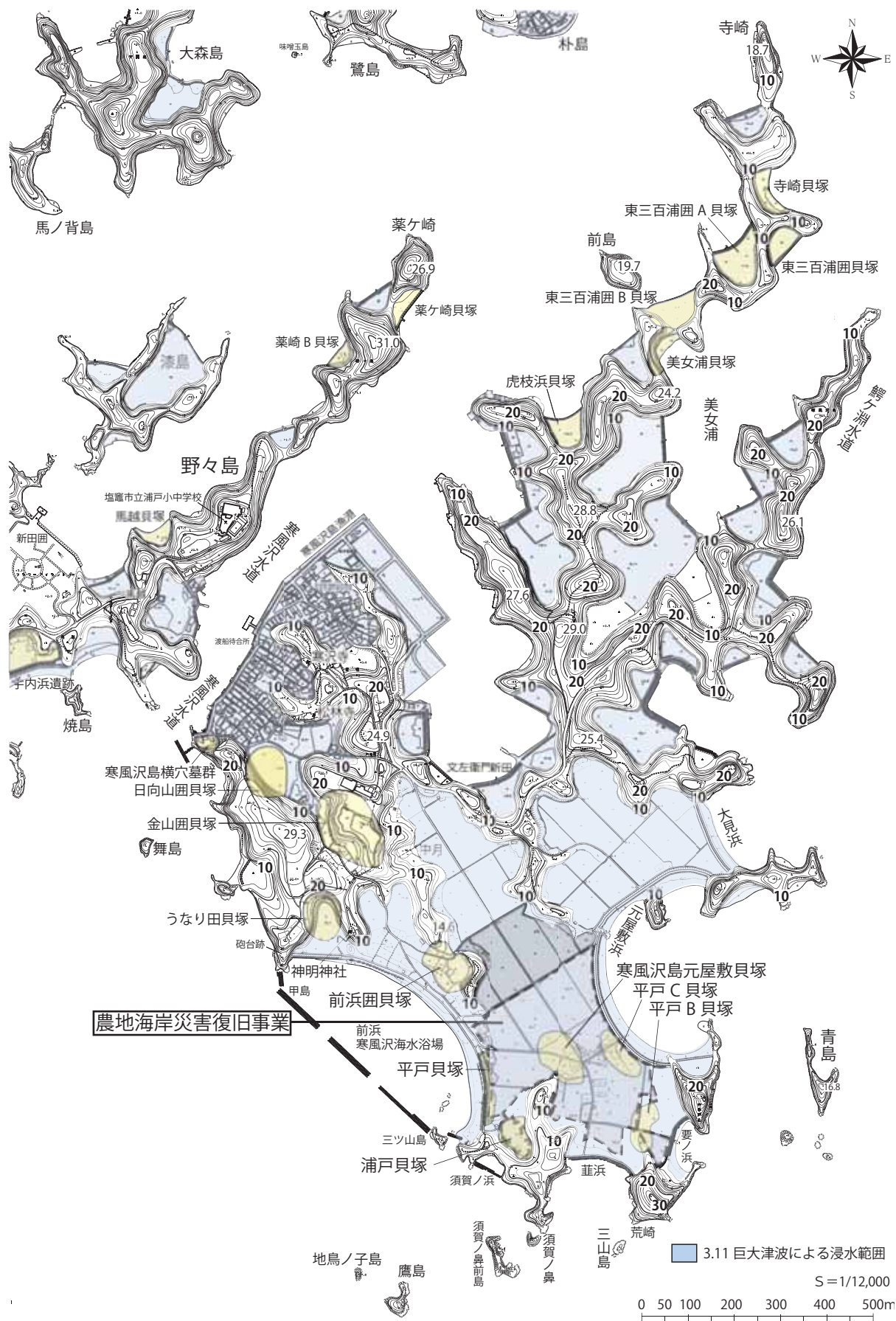
調査対象面積：175,800㎡ 調査面積：1,200㎡ 重機：バックホー 0.45（延べ6台） 作業員：なし

主な遺構・遺物：〈寒風沢元屋敷貝塚〉混貝土層より土師器・製塩土器・須恵器破片、貝類、骨片

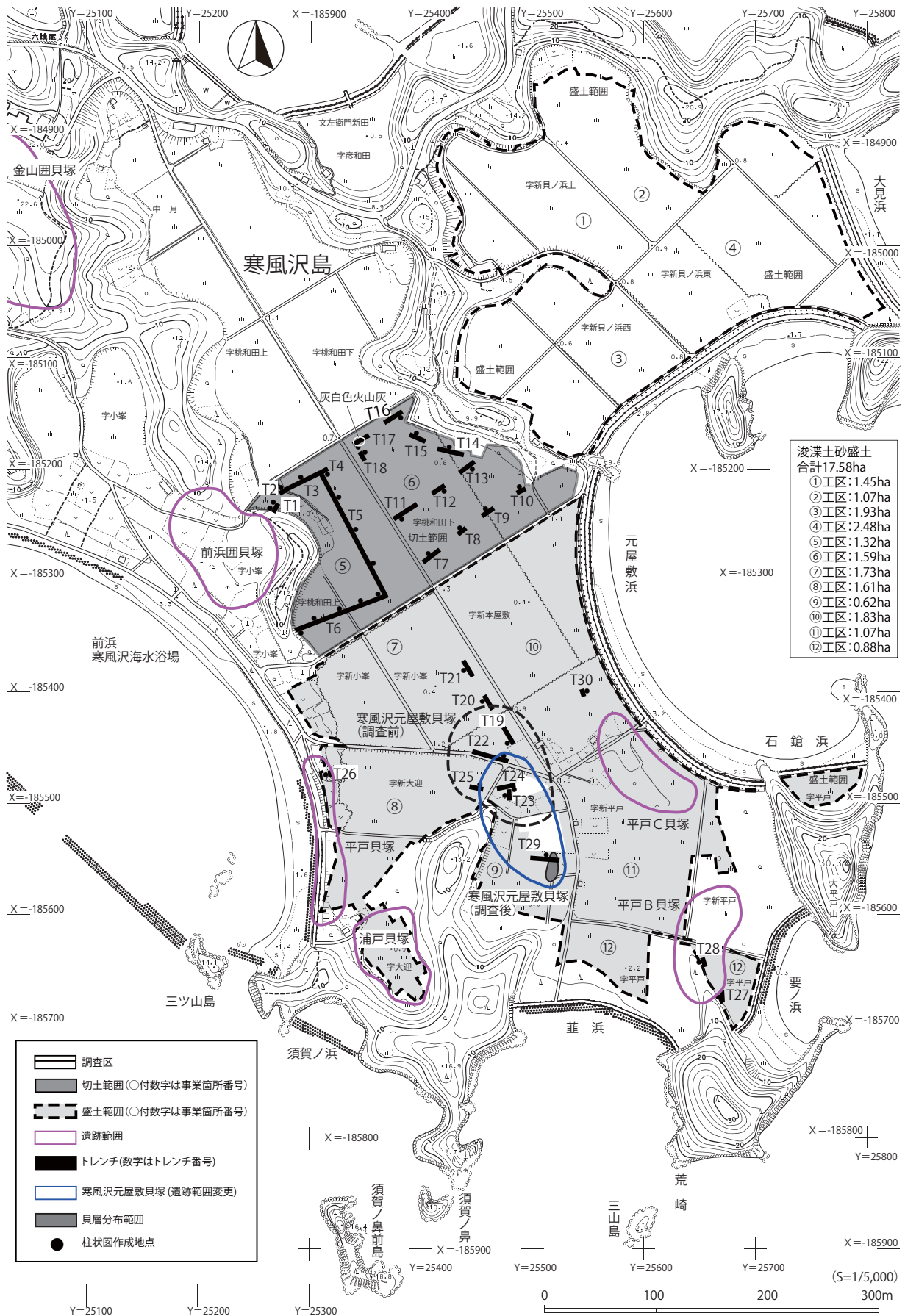


国土地理院地図・空中写真閲覧サービス CTO20119-C6-51.jpg を使用、編集
2011/5/23 撮影。元屋敷浜、前浜の海岸堤防が決壊。島南半部が冠水。

図版5 上空からみた寒風沢島南部



第7図 寒風沢島の遺跡分布



（１）調査に至る経緯と調査経過

東日本大震災からの復興事業として、宮城県仙台地方振興事務所は、塩竈市浦戸寒風沢島南部において「浦戸農地海岸災害復旧事業」を計画している。事業対象地は、「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」の津波によって2.0m～4.0m冠水した被災農地で、旧耕作地と道路の地割にしたがって12の工区（①～⑫工区）に区分されている（第8図①～⑫）。そして、寒風沢島北部の浚渫土砂を用いて、総面積17.58haとなる12の工区全体を60cm前後の厚さで盛土する計画である。

調査対象地には寒風沢元屋敷貝塚、平戸貝塚、平戸B貝塚、平戸C貝塚、浦戸貝塚が含まれ、前浜囲貝塚が隣接する。いずれも寒風沢島南部に位置する平安時代の貝塚・製塩遺跡である。これまで発掘調査が行われていないため、その内容については不明確な点が多い。

調査対象地の現況は、大部分が津波で冠水してその後耕作されていない水田で、一部が畑地として営農されている。いずれも標高1m以下の平坦地で、⑤・⑥・⑦・⑧・⑩工区の大部分は標高-0.7m前後の海面下の標高となっている。工事予定区域の寒風沢元屋敷貝塚内の畑地（⑨工区）からは、現在も土器片を表面採集することができる。

事業者の宮城県仙台地方振興事務所と宮城県教育庁文化財保護課、塩竈市教育委員会による事前協議の結果、周辺に遺跡の分布しない①～④工区については確認調査を行わないことにした。そして、寒風沢島元屋敷貝塚の位置する⑦・⑨工区、平戸貝塚が位置する⑧工区、平戸C貝塚の位置する⑩・⑪工区、平戸B貝塚の位置する⑫工区については、盛土高が60cmと東日本大震災前の宮城県発掘調査基準よりも低いため、本市教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の協力のもとに確認調査を行い、内容把握するに留めることにした。

また、前浜貝塚東側の60cm掘削後に同程度盛土する⑤・⑥工区については、同様に確認調査をまず行い、重要な遺構等が検出された場合には本発掘調査を行うことにした。

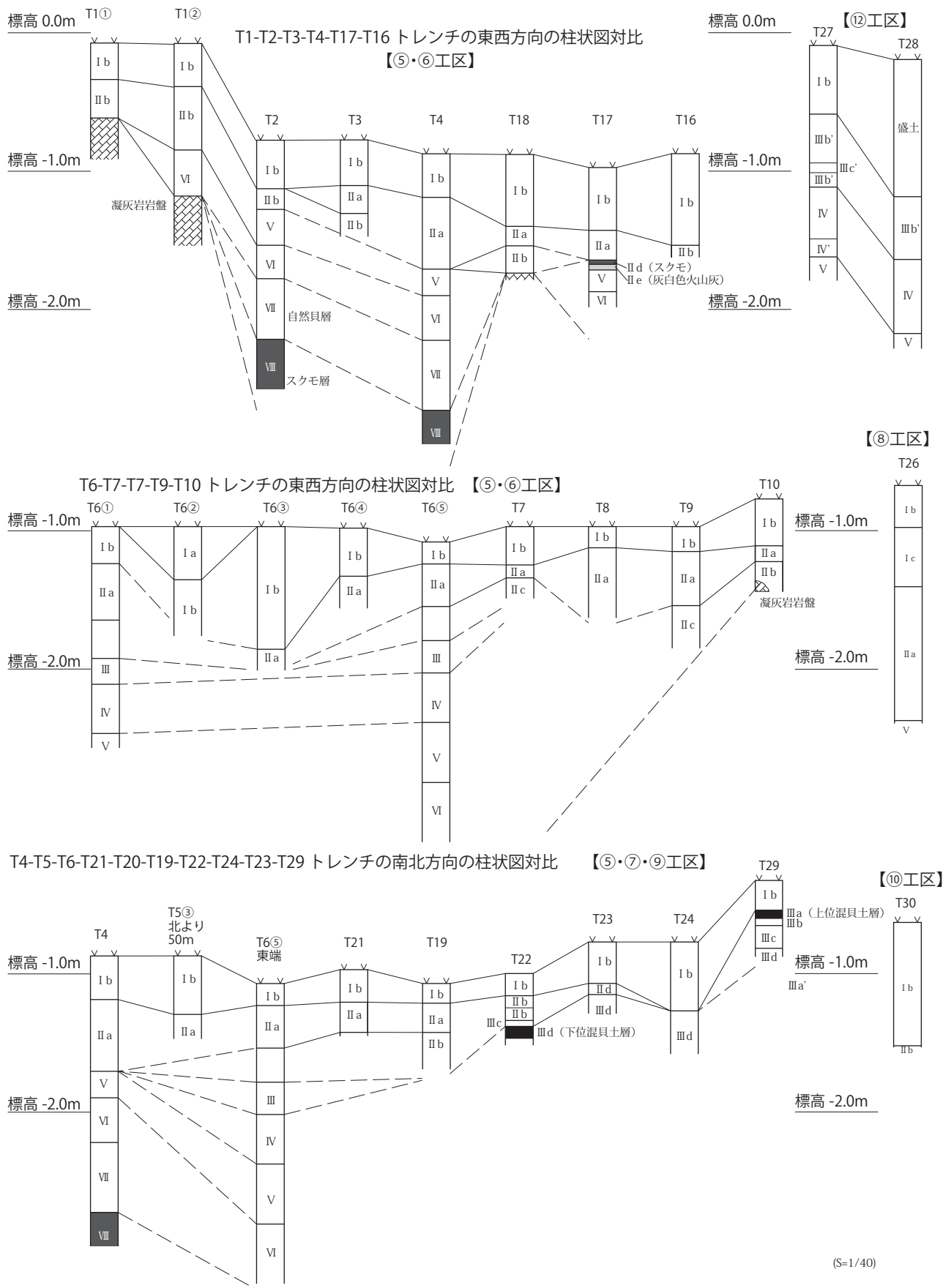
確認調査は、掘削工事を伴う前浜囲貝塚東隣の⑤・⑥工区、及び寒風沢元屋敷貝塚の遺跡範囲を中心に、30箇所の特レンチを設定して行った（第8図）。ほとんどの特レンチで湧水が著しく、排水を行いつつ作業を進めた。掘削にあたっては0.45m³級バックホーを使用し、そののち人力による精査を実施した。調査の期間中、宮城県仙台地方振興事務所農業農村整備部職員の作業協力を得た。

なお、浦戸貝塚は当初の災害復旧事業計画では盛土する予定だったが、東日本大震災で津波による被災を受けず、現在も水田として耕作され、この事業から除外されることがわかったため、調査対象から外した。また、⑤・⑥工区については、確認調査の結果、重要な遺構・遺物が発見されなかったため、本発掘調査を行わないことにした。

（２）確認調査の成果

１）基本層序

30本の特レンチ（T1～30）を設定し、計40箇所で柱状図を作成した（第8・9）。その結果、調査区が離れるため別個の堆積状況を示す平戸B貝塚を除き、基本層序は下記のように整理された。



第9図 浦戸農地海岸災害復旧事業に係る寒風沢元屋敷貝塚他確認調査の土層柱状図

- 【Ⅰa層】表土（腐植土）
- 【Ⅰb層】表土（耕作土）。黒褐色（10YR3/3）粗砂質細砂～中砂層。
- 【Ⅱa層】灰色（5Y4/1）粗砂質極細砂～細砂層。
- 【Ⅱb層】灰色（5Y4/2）細砂～中砂質極細砂層で、破碎貝片を含む。
- 【Ⅱc層】黄褐色（10YR5/6）粗砂～細礫層で、φ 4 mm以下の破碎貝を多く含む。
- 【Ⅱd層】灰色（10Y4/1）極細砂・細砂～黒褐色（2.5Y3/1）シルト質極細砂で、スクモを一部含む。
- 【Ⅱe層】灰白色火山灰（十和田a火山灰）層。10世紀前葉〔通説では915年（町田洋他1981）、考古学的には912年（秋田県大館市道目木遺跡埋没家屋の年輪年代）～934年（陸奥国分寺七重塔焼失年代）〕に十和田火山を給源として東北地方の広範囲に降灰した広域火山灰。
- 【Ⅲa層】黒褐色（10YR2/2）シルト質極細砂～細砂。上位混貝土層。
- 【Ⅲb層】黒色（10YR1.7/1）細砂～中砂層で、地山由来のクサリ礫をわずかに含む。
- 【Ⅲc層】灰オリーブ色（5Y4/2）中砂質粗砂～極粗砂層で、砂粒の淘汰は良い。
- 【Ⅲd層】暗灰色（N3/1）中礫混じり粗砂質細砂～中砂層で、拳大前後の凝灰岩円礫と破碎貝片を多く含む。T22トレンチでは土器片を少量含む（下位混貝土層）。
- 【Ⅳ層】暗灰色（N3/1）中礫混じり粗砂質細砂～中砂層で、破碎貝片含む。海成砂層とみられる。
- 【Ⅴ層】黒褐色（2.5Y3/1）中砂～粗砂質細砂層で、破碎貝、スクモブロックを含む。海成砂層とみられる。
- 【Ⅵ層】灰色（5Y4/1）中砂～粗砂質細砂層で、破碎貝片を含む。砂粒の粒径は均一で、海成砂層とみられる。
- 【Ⅶ層】オリーブ色（5Y3/1）粗砂質細砂～中砂層で、破碎したり大きさにバラつきのあるアサリ・マガキなどを多く含む。
- 【Ⅷ層】黒色（10YR1.7/1）粘土質シルトのスクモ層。陸生層とみられる。
- 【Ⅸ層】凝灰岩岩盤（新第三紀中新世松島湾層群大塚層）。

2) ⑤・⑥工区の確認調査

前浜囲貝塚の東隣区域にあたる⑤・⑥工区では、18箇所のトレンチ（T1～T18）を設定し（第8図）、工事掘削深度よりも深い地表下60cmの砂層上面（Ⅵ層）を目処に確認調査を進めた。この砂層は肉眼でも粒度が均一で揃うことから、広範囲に広がる海成堆積物と考えられる。遺構はなく、遺物も出土しなかった。

また、⑤工区のT2・4・6トレンチで下層確認のための深掘りを実施した結果、厚さ数cmの自然貝層（Ⅶ層）を海拔約-1.8mで確認した。T27トレンチを含む広範囲に広がっている。この層には、カキ・アサリなどの貝が多数含まれ、破碎したり大きさにバラつきのあることから、自然貝層と判断した。年代は明らかでないが、海拔約-1.8mに位置し、下層のⅧ層のスクモ層が陸生層とみられること、松島湾ではほぼ同層準に縄文時代前期の縄文海進が位置付けられていること（松本秀明・伊藤昌文1998、松本秀明他2014）から、縄文時代前期の縄文海進期に形成された海成の自然貝層の可能性が高い。

また、⑥工区のT17トレンチを中心とする狭い範囲で、10世紀前葉に降灰した灰白色火山灰（Ⅱe層）を検出した。

そのすぐ隣のT18トレンチ、及び西側に凝灰岩岩盤の海食崖のある⑤工区北西隅のT 1 トレンチで、凝灰岩岩盤を検出した。T14～16トレンチ東側にも凝灰岩岩盤の海食崖があり、T10トレンチでも凝灰岩岩盤を検出した。⑤・⑥工区に設定したT 1～4・17・16トレンチに沿って、東西方向の柱状図を配置すると（第9図上段）、⑤・⑥工区の東西両側に凝灰岩岩盤の海食崖があって中央が深くなる入江状の旧地形に、縄文海進により海水が侵入した様子が想定される。

出土遺物は、⑥工区のT12トレンチの砂層より出土した土師器体部の細片1点のみであり、磨滅が著しいことから周囲より流されてきたものと判断した。

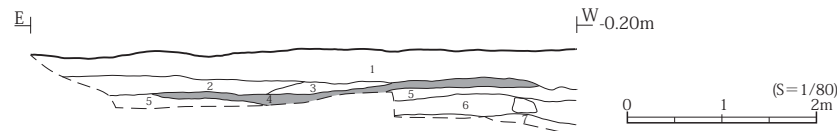
3) ⑦・⑧・⑩工区の確認調査

確認調査に入る前には、⑦工区南端と⑧工区東端に寒風沢元屋敷貝塚が係るとみていた（第8図）。⑦工区に4箇所（T19～22）、平戸貝塚の西に隣接する⑧工区に1箇所（T26）、⑩工区の平戸C貝塚に近い1箇所（T30）にトレンチを設定した。T22トレンチについては次項で記載するが、他のトレンチではいずれも砂層が検出され、遺構・貝層・遺物は検出されなかった。

4) 寒風沢元屋敷貝塚（⑦・⑨工区）の確認調査

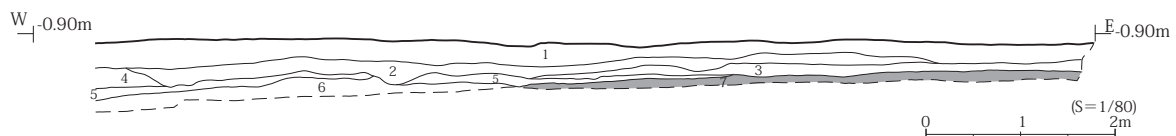
寒風沢元屋敷貝塚では、微高地状の高まりを中心に8箇所のトレンチ（T19～25・29）を設定した（第8図）。

T29トレンチでは黒色の混貝土層（Ⅲa層）を検出し、古墳時代後期栗圀式期～奈良時代の非ロクロ土師器球胴甕（第13図1）、非ロクロ土師器甕（第13図2）、非ロクロ土師器鉢または甑（第13図3）、平安時代のロクロ土師器甕（第13図4・5）、ロクロ土師器内黒杯（第13図6）、須恵器杯（第13図7）が出土した。自然遺物ではアサリ・マガキ・アカニシなどの貝類や獣骨が出土した（第12図）。



基本層序層番号	土 色	土 性	備 考
I b 1	黒褐色 (10YR3/3)	粗砂質細砂～中砂層	表土。耕作土。
II b 2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト質極細砂～細砂層	やや粘性あり
II b 3	黒褐色 (2.5Y3/1)	極細砂～中砂層	
III a 4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト質極細砂～細砂	貝（アサリ・マガキ）、土器片を多く含む上位混貝土層。
III b 5	黒色 (10YR1.7/1)	細砂～中砂層	地山由来のφ5cm以下のクサリ礫を僅かに含む
III c 6	灰オリーブ色 (5Y4/2)	中砂質粗砂～極粗砂層	淘汰良好。海成砂層。
III d 7	暗灰色 (N3/1)	中礫混じり粗砂質細粗～中砂層	円磨度の高いクサリ礫を多く含む。淘汰悪い

第10図 寒風沢元屋敷貝塚確認調査T29トレンチ南壁断面図



基本層序層番号	土 色	土 性	備 考
I b 1	黒褐色 (10YR3/3)	粗砂質細砂～中砂層	表土。耕作土。
II b 2	黒褐色 (2.5Y3/1) ～ 灰色 (10Y4/1)	シルト～シルト質極細砂層 極細砂～細砂層	
II b 3	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト質極細砂層	
III b 4	灰色 (10Y4/1)	細砂～中砂層	φ～1mmの破砕貝片含む。2～3cm厚の水平ラミナ10枚。
III c 5	緑黒色 (7.5GY2/1)	細砂質中砂層	灰色 (10YR4/1) 細砂のラミナあり。
III c 6	暗灰色 (N3/1)	粗砂質細砂～中砂層	破砕貝片を含む
III d 7	暗灰色 (N3/1)	中礫混じり粗砂質細粗～中砂層	円磨度の高いクサリ礫を多く含む。淘汰悪い。下位混貝土層。

第11図 寒風沢元屋敷貝塚確認調査T22トレンチ北壁断面図



1 : T22-7 層（下位混貝土層） 2～6 : T29-4 層（上位混貝土層）
 1 : ハマグリ 2 : オキシジミ 3 : アサリ 4 : アカニシ
 5 : マガキ 6 : 骨片

第12図 寒風沢元屋敷貝塚出土の主な自然遺物

主体を占めるのはアサリで、ハマグリ・マガキがそれに次ぐ。最新の遺物は第13図7の須恵器坏で、底径が大きく、回転糸切り無調整であることから、9世紀中頃のものと思われる。出土土器の年代幅は7世紀中頃から9世紀中頃と大きく、異なる時期の遺物が混在しているものの、上位混貝土層の形成時期は9世紀中頃のものと考えられる。

周辺のトレンチでこの層準で遺物を含む混貝土層が認められないことから、この混貝土層の分布範囲は比較的狭いものと考えられる。

T22～25トレンチでは、緑灰色の凝灰岩円礫を多く含むⅢd層を検出し、T22トレンチでは製塩土器片（第13図8）、非クロ土師器甕（第13図9）が出土した。被熱した凝灰岩円礫もT22トレンチを中心に出土したことから、周囲に製塩遺構が存在する可能性もある。

5）平戸B貝塚（⑫工区）の確認調査

平戸B貝塚範囲内で2箇所（T27・28）のトレンチを設定したが、遺構・貝層・遺物のいずれも検出されなかった。それぞれのトレンチでは破砕貝を含む砂層（Ⅳ・Ⅴ層）上に湿地性の堆積物と考えられる黒色粘質土（Ⅲb'層）が薄い中砂～粗砂層（Ⅲc'層）を部分的に挟んで厚く堆積していた。離水後長期間にわたって湖沼環境が形成されていたものと考えられる。

（3）まとめ

確認調査の結果、寒風沢元屋敷貝塚（⑦工区南端～⑨工区）で混貝土層を検出し、これが9世紀中頃までに形成されたが、分布範囲が登録の遺跡範囲よりも南側に広がっていることが明らかになった（第8図）。これを受けて、寒風沢元屋敷貝塚の範囲については、変更の手続きを取ることにした。また、事業予定地は盛土の高さがあまりなく、事業実施により遺跡に与える影響は軽微であると判断された。

また、⑤～⑫工区では遺構・貝層・遺物とも確認されなかった。縄文時代～古代にかけて、事業予定地は海が大きく入り込む海岸であったとみられたことから、事業の実施により遺跡に与える影響は軽微なものと判断された。

【T29-4層（上位混貝土層、Ⅲd層）】



【T22-7層（下位混貝土層、Ⅲd層）】



No.	種 類	出土トレンチ・層位	特 徴
1	非ロクロ土師器球胴甕	T29-4層（上位混貝土層）	口縁～体上部破片。口径19.2cm。外面：口縁ヨコナデ、体部ケズリ。内面：ヨコナデ、ナデ。古墳時代後期（栗園式期）。
2	非ロクロ土師器甕	T29-4層（上位混貝土層）	体下部～底部破片。外面：底部：木葉痕。内面：ナデ。
3	非ロクロ土師器鉢or甕	T29-4層（上位混貝土層）	口縁部～体上部破片。底径13.0cm。外面：口縁ヨコナデ、体上部ハケ目。内面：口縁ヨコナデ、体上部ハケ目。古墳時代後期（栗園式期）～奈良時代。
4	ロクロ土師器甕	T29-4層（上位混貝土層）	口縁部～体上部破片。口径26.2cm。口縁部受け口状。両面：ロクロナデ。9世紀代。
5	ロクロ土師器甕	T29-1層（表土）	口縁部～体上部破片。口縁部受け口状。外面：平行叩き→ロクロナデ。内面：ロクロナデ。8世紀末～9世紀前葉。
6	ロクロ土師器内黒環	T29-4層（上位混貝土層）	口縁部破片。外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理。9世紀代。
7	須恵器環	T29-4層（上位混貝土層）	体下部～底部破片。底部回転系切り無調整。底径7.2cmと大きい。9世紀中頃。
8	製塩土器	T22-7層（下位混貝土層）	口縁部破片。口唇部口状。非ロクロ、粘土紐輪積み痕。明黄褐色。二次加熱を受け、赤変。
9	非ロクロ土師器甕	T22-7層（下位混貝土層）	底部破片。底径6.5cm。

第13図 寒風沢元屋敷貝塚出土の主な土器



寒風沢元屋敷貝塚 T29 トレンチ全景（東から）



寒風沢元屋敷貝塚 T29 トレンチ南壁貝層堆積状況（北西から）



寒風沢元屋敷貝塚 T22 トレンチ全景（南から）



寒風沢元屋敷貝塚 T22 トレンチ北壁貝層堆積状況（南西から）



⑤工区調査前風景（南から）



T1 トレンチ全景（南東から）



T1 トレンチ西側（南から）



T2 トレンチ全景（東から）

図版6 浦戸農地海岸災害復旧事業に係る寒風沢島元屋敷貝塚他確認調査（1）



T 3 トレンチ全景（東から）



T4 トレンチ断面（南から）



T 5 トレンチ（南東から）



T5 トレンチ断面 北より 50m (西から)



T6 トレンチ全景（東から）



T6 トレンチ西端断面（南西から）



⑥区調査前風景（南から）



T 7 トレンチ全景（西から）

図版 7 浦戸農地海岸災害復旧事業に係る寒風沢島元屋敷貝塚他確認調査（2）



T7 トレンチ断面（南から）



T 8 トレンチ全景（東から）



T10 トレンチ断面（南から）



T16 トレンチ全景（西から）



T16 トレンチ断面（北から）



T17 トレンチ全景（北西から）



T17 トレンチ含灰白（北から）



T24 トレンチ全景（西から）

図版8 浦戸農地海岸災害復旧事業に係る寒風沢島元屋敷貝塚他確認調査（3）



T24 トレンチ断面（北西から）



T25 トレンチ（東から）



T25 トレンチ断面（南から）



T26 トレンチ全景（南から）



T27 トレンチ全景（北から）



T27 トレンチ断面（東から）



T28 トレンチ全景（南から）



T30 トレンチ全景（北から）

図版 9 浦戸農地海岸災害復旧事業に係る寒風沢島元屋敷貝塚他確認調査（4）